

## 地獄への彷徨

岐阜県 佐々木 俣 子

昭和二十年八月九日未明、この日は私にとって運命が一転した忘れられない日である。開拓団として渡満した父が、大陸に将来の夢をたくしながらか生活のメドをつけ、呼び寄せられて母と渡ったのは二歳の頃であった。あの広大な平野で鳥のさえずり、野花の咲きみだれる豊饒な土地で両親の愛を受け、小学校三年の夏を迎えた。終戦間ぎわに父は応召され、父の留守を母と姉弟仲良く暮らしていた。八月九日といえば、日本では長崎に原爆が投下され、満州国ではソ連軍が侵攻してきた日であった。頼みとする関東軍は、いち早く撤退してしまい、まるでゴミのように国境の最前線に置き去りにされた老幼婦女子のまさに生と死の想像を絶する彷徨がその日から始まったのであった。

私たち開拓団家族の群れは、約一年にわたる逃避行の

中で、八万人にもおよぶ貴い生命が、次から次へと広野の地に冷たいむくろと化していったのです。私の母も弟も……。栄養失調と極限に追いつめられた厳冬下に、寒い寒いと細まりゆく母の声にたった一枚、宝物のように持ち歩いてきた着物を、またたった一本のマッチでなんのためらいもなく燃やして暖をとったつかの間の火は、瞬時の母と子の情を結ぶ最後の行為であった。異郷の地で、一人となったこれから先の自分のたどるべき方向の予測もつかず、いつも死と隣り合わせの苦難をこえていく訓練を余儀なくされながら、修羅の極地で幾度も不思議に生命を全うさせていただいた私であった。

開拓団は、国策故にひたすら開拓に汗を流した集団である。そういう意味では犠牲者であるが、侵略された側からみたら許せないことであろう。日本がなした開拓の行為は、日本の政府も、関東軍も開拓団も、祖国の日本人も、すべて一億火の玉となって侵略のキバをむいて中国大陸を襲ったのである。悲しいことだが、世界の歴史からぬぐうことのできない汚点を残してしまった。愚かな侵略戦争の爪跡は、永久に消すことのできない日本の

国が世界に残した汚点であり、敗戦を機に、悲劇の道をたどらなければならなかった満州開拓団の慟哭でもあると思う。あの広大な平野と高粱畑の平和が、ソ連の開戦と匪賊の襲撃で混乱状態となり、すべてを捨てて命からがら南へ南へと逃げまどったあのすさまじいまでの雨の中を、またあるときは、照りつける太陽の下を長蛇の列をなして右往左往しながら、走りに走った思いが胸を切り裂くようにあふれ出してくる。食事がなく、着る物がない、医者もない、薬もない、すべてがないづくしの逃避行。体は骨と皮が包むだけで、やせて衰弱し切った体に歩行する余力がなく、足の肉が破れて、素足に血が流れて痛いのを、痛いとも言えず、ひたすら集団にすがって歩み続けた。私は死ぬことよりも生きることをほうがつかった。引揚げ体験を通して、憎み合うことの愚かさ、人の生命の貴さ、助け合うことの貴さ、飢餓の苦しみ、のどの渇きの苦しさが今日までの、私の生きるべき目的と方向を指し示してくれた。この私の命は、今なお異郷の地で眠る私の母、弟、そして同胞と同じ生命なのである。四十五年へた今、満州という言葉すら忘れ

られていく歴史の過程で生き残った者だけが知っている同胞の無念な痛哭を、私は生涯かかって晴らしていきたいと思っている。おごりにおごった日本は、戦線を拡大し、とうとう第二次世界大戦へと突入し、何百万人という犠牲者を出した。この間の蛮行に対する恨みの声はいまだアジアの人びとから去りません。わが国も忘れられない引揚げの落し子として、現在もお残留孤児の肉親捜しが続いています。しかし、一方戦勝国の蒋介石總統が一怒みに報いるに徳をもってせよ」という大号令のもとに、本来ならば虐殺されてもしかたがないほど憎まれていた日本人二百万人をぶじ送り返してくれた。この偉大なる恩恵は、未代まで忘れてはならないできごとだと思ふ。私たちは犠牲になられた御霊の前に二度と同じ過ちを繰り返さないことをお誓いし、戦後の富めるすべてを他の人のために使い、生かされた生命を天命に従って、犠牲精神を発揮し、岐路に立っている日本国民の一人として、同胞の貴い犠牲の代価を無駄にすることなく天意の方向へ正しく向かっていけるよう、ひたすら祈りを深めていこうと歩んでいます。そして、次の世代へ平

和な世界への悲願をこめて心の正しい生き方を伝えていくこと、これが異郷の地で果てた私の母、弟、同胞たちへの手向けの供花としたい。

安らかに眠れ、母よ、弟よ、そして八万の同胞達よ……。

## 撃ちのめされた興亜の礎

福岡県 石井 侃

私は二男であった。満州に骨を埋めることを決心し、昭和十四年、旅順工大鉱山科へ入学した。第二次大戦はますます激化し、学校の修学年も短縮された。卒業後「満州軽金属製造株式会社」（撫順市松岡町）に就職した。飛行機の部分品、アルミ、ジュラルミン製造に、夜も日もなく生産々々の日々だった。戦時中最も必要とする武器の一端製造だからである。しかし、戦争が激化し、会社の工員も次から次と召集され派遣されていく。残された者は責任ますます重大で、日夜生産々と血眼になつ

て働いた。

二十年八月十五日あの終戦の詔勅を聞いた「まさか」「日本が負けた。」とめどなく悔しさに、涙があふれた。

私の家は、撫順市の西一条通りで、支那町に一番近い所にあった。会社の社宅で、六十戸いっぱいだった。敗戦によって満人の態度が一変し恐ろしい暴動が、起きた。

私どもは、社宅の屋根裏の梁の上に息をひそめ腰かけて、何時間も何時間もかくれた。飲まず食わず、こどもたちの口をふさぎ、小使はそのまま屋根裏でした。ひょっと見ると、この社宅目がけて、ワーツと五、六百人の満人が暴動に出た。大事に大事に持って来た全財産をひたたくっていく。ふとんが出る！ ミシンが出る！ 箆筒が出る！ ラチオが出る！ 洋タンスが出る！ 満人の心の浅ましさを、しまいには、畳、フスマ、障子、床板までとりこわした。こんどは命が危ない。飲まず食わず裸一貫で本社のある松岡町の独身寮へ夜中逃げ出した。

独身寮では茶碗三個と箸と毛布が渡され、何一つ物がない生活が始まった。何はともあれ、社宅の財産が惜し